

(目的) 足の痛み、疲労を助長させる大きな要因として、ヒール高の影響を挙げる事ができる。ヒールを着用するとボールウィズは踏み出し部として接地するが、その後部は踵まで角度をもって傾斜することになる。しかし、JISをはじめ、サイズ、ウィズの表示はプレーンな状態における測定値によるものであり、足が靴の拘束を受けない状態でヒール状に傾斜した場合、足の形状やサイズがどのように変化するかは知られていない。本研究ではヒール高の変化にともない、足部形状、足部サイズがどのように変化するかについて、靴による拘束を受けない状態にとらえ、検討を試みた。

(資料、方法) 被験者は、23-58才の健康な女性23名、および19-20才の短大生13名である。計測には、ボールジョイント部から踵までの傾斜を変化させることのできる、私案の足型測定器を用いた。傾斜角度 0° 、 7° 、 15° 、 20° における両足の足型を採取し、第2指骨中端、踵骨中点、左右ボールジョイントの4点を記し、足長、足幅を測定した。また、同時に、各傾斜時における足囲ボール、踵の前傾角度の測定を行った。

(結果) 1. 足部の傾斜にともない足長は増大し、傾斜角度 20° では平均4.5mm増大した。
2. 足幅ではサイズに大きな変化は認められないが、傾斜角度の増加にともない左右差が強調された。
3. 第2指先端と左右ボールジョイントを結ぶ角度は、傾斜角度の増加にともないシャープになる傾向が示された。
4. 傾斜角度の変化にともなう足型輪郭形状の変化は一定のリズムをもって現れるのではなく、個人差があり、これはバランス保持姿勢の取り方に関係していると考えられる。